

ワークライフバランス型労働から始める活気ある街の実現

1.現状

街の活気がないと言われて久しい。博多のような大都市ではそうでもないかもしれないが、地方に行けば街中でもほとんど人を見ない、といったことはよく言われることだ。昔からそうだとされれば確かにそうかもしれないが、夜遅くまで残業せざるを得ない労働者は、平日はせいぜい1~2件お酒を飲みに行くくらいしかできないし、休日も出勤・風呂敷残業で疲弊して、外出する余裕などあまりないように思える。

2.対策~ワークライフバランス(WLB)の推進~

最近、ワークライフバランス(WLB)という考え方が注目を集めている。WLBとは、従来の仕事に偏った生き方を改めて、仕事と私生活を両立しようという考え方である。WLBを実現できれば、帰社する時間帯が早くなり、休日も休める人が増えるし、自宅にいても退屈する人は街に出てくるだろう。そして、街に出る人が増えれば、活気が増すだろうというのが私の単純な考えである。

3.ワークライフバランス(WLB)を実施するに当たっての課題・方策

WLBを推進するからといって、製品の質・量を下げてしまえば、企業の売上・信用が低下し、企業活動が立ちゆかなくなってしまう。以下では、WLBを推進するに当たっての方法について考えていく。

(1)人員の増加

一人当たりの労働時間を軽減するために、人員を増やすという方法である。人員を増加する場合に懸念されるのが「熟練度の不足」と「人件費の増加」である。熟練度の問題については、新入社員・中途社員問わず一定の時間をかければある程度解決できるとして、人件費の増加が問題となる。最近の不況で人件費の増加に耐えられる企業はほとんどないと思われるので、人員の増加というのはあまり現実的ではない。

(2)意識の改革

長時間労働者ほど仕事をしているといった認識を改めることで、不要な残業を減らす方法である。意識改革の方法には、例えば残業に対するペナルティー（長時間労働者の評価を下げる等）を課す等の方法がある。しかし、殆どムダなく忙しく働いている職場では、労働者の意識改革のみでは、減らせる労働時間は限られてくるように思える。

(3)チームワークの改善

仕事のやり方を見直して、作業量を減らす方法である。忙しい職場ほど、ほうれん草（報告、連絡、相談）がおろそかになりがちと思う。しかし、少しの時間を惜しんで情報の共有をせずにいると、仕事内容が自己満足的になり時間効率が悪くなるし、仕事に行き詰まったときに1から説明しなければならぬ。また、個人個人で作業量に偏りが生じて、工

程の遅れにつながる原因になる。

改善例として、私の職場では朝メール(*)といって毎日の仕事内容を職場全員に配信し、互いの業務量・進捗状況を把握するように務めている。会議をするほどの余裕がない場合でも、メールならば1~2分もあれば送信できるので時間効率に優れており、導入開始から半年経過した現在も継続して行われている。

[朝メールの例]

(宛先 A課メンバーリスト)

本日、午後から在社です。

9:00-12:00 [外出] B業務 資料収集 (@天神)

13:00-14:00 [会議] 工程会議

14:00-19:00 [作業] C業務 資料作成

19:00- [帰宅]

*朝メール：株式会社ワーク・ライフバランスの小室淑恵氏が提唱しているWLBを実現するための手法のひとつ